佳作
（子どもの部）

# だいじょうぶだよ、ゾウさん

瑞光小学校　六年
大友　優奈

私とこの本の出会いのきっかけは、父にすすめられたことです。二年前に祖父を亡くし、それを受けいれられずに悲しんでいた私に父が「読んでみて。」と渡してくれました。この本は、ネズミのように少しずつ心が成長していけたらな、と私に気づきを与えてくれた大切な本です。

この本の中で、幼いネズミと年老いたゾウはお互いを思いあい、仲良く暮らしていました。ずっとこのまま過ごせたら幸せなのに、ゾウは死が近づいてきていることを悟り、ネズミに「ゾウの国」の話をします。ゾウが、あのつり橋を渡って「ゾウの国」へ行ってしまったら、もう永遠に会えなくなってしまう。

大事な人がいなくなってしまう恐怖や悲しさ。私も、祖父を亡くした時に感じましたが、それを想像するだけでも、幼いネズミは恐怖でいっぱいだったと思います。

月日がたってネズミも成長し、ゾウの弱っていく姿を目の当たりにして過ごすうちに、ネズミもゾウの「老い」や「死」、「別れ」を受け入れられるようになります。これは、ネズミが一番身近な場所で、ゾウを大事にお世話していたので、がんばって受け入れたのではなく、自然に受け入れられた事なのだと思いました。私は、もう少し時間がかかってしまいそうですが、祖父を大事に思っていたので、お別れを受け入れられる時が来ると信じられ

るようになりました。

私は、この本を読んで、ネズミの心の成長を感じました。私も今、家族や友達、先生等、たくさんの人達に囲まれて生活しています。

時々、けんかすることもあるけれど、私にとって大事な人達ばかりです。これから先、新しい出会いもありますが、卒業などで会えなくなる人もいます。身近な人達を大事にしていきたいです。柳田邦男先生、素敵な本の翻訳をありがとうございました。